天明期の越前における公料巡見使宿

越前における巡見使の宿に関する研究 その1

THE HOUSES USED BY SHOGUNAL INSPECTOR IN ECHIZEN IN THE TENMEI PERIOD

A study on the private houses where the inspectors stayed and rested in Echizen (1)

国京克巳*

Katsumi KUNIKYO

With the help of old documents and records, I investigated the houses where shogunal inspectors and their attendants rested and stayed in Echizen in the Tenmei period.

The houses were the private ones in agricultural districts. The inspectors and their attendants organized three parties of five to seven members. The houses attached conditions to the first room with alcove and ceiling, the second room and another room. They were provided with the first room with toilet and bath, the second room with toilet and bath. Toilet and bath were made temporary and the wall, shoji, fusuma were repaired. Most of the farmhouses of upper class in 1787(Tenmei 7) had the first room with alcove and the second room. One third of the farmhouses had upper toilet and upper bath.

Keywords: Shogunal Inspector, Stay and rest, Farmhouse, Echizen, Tenmei

巡見使, 休泊, 農家, 越前, 天明

1. はじめに

江戸時代に幕府は私領・天領の政治の実態、幕府法令の実施状況、物価や金銀の相場、禁教と治安維持、公事訴訟などを調査・監察するために諸藩や天領へ巡見使を派遣した。各地の諸藩に派遣した巡見使を廻国(諸国あるいは私領)巡見使、天領に派遣した巡見使を公料(御料)巡見使と称した。この時、各地の大名などは巡見の道筋にあたる村々や城下町などに巡見使の宿泊や休憩のための施設を準備し、あわせてその道筋となる道路や橋の整備をおこなった。この時、巡見使を迎えるための準備あるいは後世のために数多くの記録が作成され、その一部が各地にのこされている。これら記録のうちの一つに天保9年(1838)に熊本藩へ派遣された巡見使に関して残された絵図があり、それにより巡見使の利用した休泊施設がどのようなものであったかを先学は詳細に明らかにしている^{註1)}。この研究によれば、藩の施設、客屋、寺、町屋、農家が利用され、町屋や農家などでは巡見使一行が利用する部屋の使い方や入り方、部屋数の足りない場合の処置、湯殿や雪隠の仮設など細かく報告されている。しかし、その報告は農家に限れば、例数が少なく、巡見使の宿泊した肥後全域の農家の宿に共通するものか、あるいは藩を越えて全藩に共通するものであったかは、はっきりしていない。また、参勤交代の大名が利用する休泊施設との比較をおこない、その特徴を明らかにしているが、廻国巡見使と公料巡見使それぞれが利用する宿の地域の特徴や求められる宿建築の違いについては言及されていない。

ところで、越前国は江戸時代の初期には福井藩によって大部分が治められていたが、福井藩の石高が半減する貞享3年(1686)の半知以降に天領や他藩領が新たにでき、領地の入り混じる国となった。福井藩は藩財政や越前支配の関係から越前国にあった天領の一部を預かり地(預所)として借り受け、幕府に代わって治めて収益を得ていた^{註2)}。この預所にも公料巡見使が度々派遣された。福井県あわら市下番の大連彦兵衛家文書や野尻五郎右衛門家文書、同市中番区の北嶋英彦家文書には寛政元年(1789)および天保9年の廻国巡見使と公料巡見使に関する一連の史料が多数のこされている。本論はこれら史料を中心に越前における公料巡見使の実態を確認し^{註3)}、その上で農村における巡見使の利用した宿と巡見使の関係、さらに巡見使の休泊した宿建築の実態を明らかにし、合わせて当時の農家建物の様相を明らかにしようとするものである。

本稿は天明7年(1787)に巡見使派遣が幕府によって決定され、寛政元年に実施された巡見使(天明期巡見使と称す)の記録等をおし、まず最初に公料巡見使と廻国巡見使それぞれの巡見日程、巡見道と休泊宿の村、巡見使一行の人数を明らかにし、廻国巡見使と公料巡見使の利用する宿の違いの有無を確認する。その上で公料巡見使を迎えるためにおこなわれた宿の見分記録をとおして越前における農家を用いた公料巡見使の休泊宿の実態を明らかにするものである。つづいて次稿では天保9年の公料巡見使を迎えるために作成された宿の修理見積帳を中心に検討し、公料巡見宿ごとの建物の種類、

* 国京克巳/建築設計工房 工修

Katsumi Kunikyo Atelier, M. Eng.

部屋数、その詳細な建築仕様を明らかにし、さらに公料巡見宿と福井藩との関係を述べる予定である。

2. 史料

幕府は天明7年3月27日に諸国巡見使と同時に公料巡見使の派遣を決定した^{注4)}。それにともない福井藩では早速預所の巡見道筋の道路や橋の整備、休憩所や宿泊所の準備が進められた。この年6月に休泊候補宿の建物や巡見道筋の道路を見分した記録が「御預所南条丹生坂井村々御巡見御泊御昼休宿見分覚書」(以下「見分覚書」と称す)^{注5)}で、翌々年の寛政元年3月にその工事の完成状況を確認したものが「御巡見様御泊り御昼休御宿出来見分」(以下「出来見分」と称す)^{注6)}である。この両文書を所有する北嶋家は、同家文書中から江戸時代末には坂井郡中番村の庄屋を勤めていたことが確認され、同家の文書作成者として次郎八や次郎吉の名がみられ、代々次郎八・次郎吉を名乗っていた。一方、「見分覚書」中には「郡中惣代 舟寄村五右衛門、中番村次郎吉」とあり、見分に次郎吉が参加していたことがわかる。このことからこの見分記録2冊は天明期の公料巡見使宿の見分に郡中惣代として参加した次郎吉が作成あるいは関係した文書とみられる。なお、郡中惣代とは天領の代官の下にもうけられた郡を代表する村役人で、庄屋・組庄屋の上にあり、大庄屋の下に位置する^{注7)}。両史料は天明期の公料巡見使を迎え入れるための記録で、後述のように実際に休泊した村名とも多くが一致している。

「見分覚書」には公料巡見の道筋の道路や橋の様子とその修理内容、泊り宿となる10ヶ村の宿候補建物、昼休みの食事村となる9ヶ村の宿候補建物を藩役人とともに見て廻り、座敷・次ノ間やその他の部屋の数と大きさ、その縁側の有無、上下それぞれの雪隠や湯殿の有無、部屋の損傷程度や様子、それに基づく修理や仮物設置の指示などが記録されている。見分された宿の所在地域は南条郡・丹生郡・坂井郡の預所で、南条郡3ヶ所、丹生郡7ヶ所、坂井郡9ヶ所で、何れの村も農村である(第3章図1を参照)。「出来見分」は「一御順見様御廻村御泊り御昼休御宿并二道橋出来形為御見分」と冒頭にあるように巡見使のために準備した泊り宿や休み宿と、巡見道筋の道橋の出来栄を確認した記録である。宿では未完成の部分を一両日中に完成させるよう申し渡しをおこない、見苦しい部分には新たに囲いを設けさせるなどしている。また、道路の未完成部分についても一両日中に完成するように指示している。この他に巡見使休泊時の接待の担当者である宿の仮亭主・脇亭主・給仕人の名があり^{注8)}、さらに泊り宿に設けられた番小屋の建設位置と向きが記され、巡見使の来訪が間近い時期の見分であることがわかる。見分された宿の地域は南条郡・丹生郡のみで、坂井郡はみられない。「見分覚書」と「出来見分」を比較すると、前者で小曾原村の泊り宿が2軒であったものが、後者では寺が追加されて3軒となっている。また、「見分覚書」に泊り宿となる小曾原村と厨浦・道口浦の間に昼休み宿がみられないのは、巡見の道筋にあたる福井藩領の二階堂村で昼休み宿をとる予定となっていることが同文書にみられ^{注9)}、福井藩領内の休泊宿は管轄外として見分の対象でなかったことがわかる。

3. 公料巡見使と廻国巡見使

3. 1 準備と福井藩

「見分覚書」によると、天明7年6月19日より宿候補となる建物

の修理前見分がおこなわれた。南条郡・丹生郡の見分には吉田忠兵衛、橋本寛右衛門、郡中惣代で坂井郡の舟寄村五右衛門、同中番村次郎吉が参加し、坂井郡の見分には郡中惣代として丹生郡気比庄の甚助、坂井郡東長田村の彦左衛門が参加した。吉田忠兵衛、橋本寛右衛門の素生はわからないが、郡中惣代より前に書かれていること、本人あるいはその子とみられる橋本寛右衛門という名の小算が預所から福井藩領となった坂井郡堀江十楽村の弘化3年(1846)の物成銀米納方文書にみられるところから、福井藩の預所を担当する下級役人とみられる^{注10)}。「出来見分」によると、翌々年の寛政元年3月6日より工事の完成を検査する出来形の見分が、福井藩の徒目付永井治左衛門、林原忠左衛門、郡組大久保利太夫、預所の郡中惣代で坂井郡東長田村の彦左衛門、南条郡阿久和村の太右衛門によっておこなわれた。出来形見分の前月2月には、福井藩は廻国および公料巡見使の出迎あるいは領内・預所巡見中における藩役人や農民の上層役人である大庄屋・郡中惣代・庄屋・長百姓の服装に至るまでの諸雑事について触れを出し、準備をおこなっている^{注11)}。福井藩の預所組織は元締役、目付、郡奉行、代官、勝手請込、徒目付、下代(手代)、組之者(郡組ともいい足輕)で^{注12)}、徒目付の永井治左衛門、林原忠左衛門、郡組大久保利太夫はいずれも預所組織の下級役人にあたり、預所組織の藩下級役人が宿の修理出来形を見分していることになる。しかし、修理前見分や修理後の出来形見分には福井藩の作事関係を担当する役人の名がなく、関与がみとめられない^{注13)}。宿の修理前後の見分で、越前北端の坂井郡と南の丹生・南条郡を含めた3郡が一緒におこなわれているのは、預所内が一つの藩のように治められていたからである。そのため、福井藩の作事関係を担当する役人の関与が巡見使宿の修理工事にみられなかったのであろう。このことは文政2年以降に福井藩領となった時期の天保9年におこなわれた公料巡見使のための準備に、福井藩作事所の役人が関係していたことと異なる点である^{注14)}。

3. 2 巡見使の日程・道筋と休泊宿村の位置

ところで、公料巡見使に従って道中を同道し、諸用事を勤めた預所の郡中惣代であった中番村次郎吉の記録である「御巡見御泊村中聞書帳」^{注15)}によれば、公料巡見使は寛政元年3月27日に今庄に到着し、4月19日までの22日間越前を巡見、直接幕府の代官が支配する天領と預所などを見て廻り、その後加賀に向った。「御巡見御泊村中聞書帳」から公料巡見使が寛政元年3月末から4月にかけて実際に越前で休泊した宿村^{注16)}(図1に●印)と天領・藩領の区別、「御巡見御廻村御順道」^{注17)}から寛政元年2月3日時点で休泊予定となった宿村、「見分覚書」から天明7年6月時点での休泊候補の宿村(図1に□印)を表1に示し、宿村の位置を図1に記した。また、「御領巡見様御休泊并御本陣名前」^{注18)}から同表に天保期(天保9年4月中旬から閏4月上旬)の公料巡見使の越前で休泊した宿村を合わせて示した。これをみると、天明期の公料巡見使が休泊した宿は天領や預所の村だけでなく、道筋の福井藩領・西尾藩領・鯖江藩領の村でも休泊し、当初の「見分覚書」にある休泊宿の候補村とも異なっているものがある。巡見が近づくにつれ、向新保村(南条郡)、宇須尾大谷村・平井村(丹生郡)、田端村・高塚村(坂井郡)のように預所内の休泊予定であった宿村が、昼休み宿や泊り宿のいずれの候補にもあがっていない西尾藩領の池上村・下中津原村(南条郡)、片屋村・下野田村(丹生郡)、針原村(坂井郡)の村々に、あるいは天領の柿原

表 1 公料巡見使の日程と宿泊宿村

天明期							天保期						
番号	日付 (寛政元年)	休泊の区別	宿村(町)名 (実地)	領区分	「御巡見御廻村御順道」 (寛政元年2月3日予定)	「見分覚書」 (天明7年6月)	日付 (天保9年)	「御巡見様御休泊并御本陣名前」 (実地)					
1	3月27日	泊り	今庄駅	福井藩	○		4月17日	○					
2	28日	小休止	小倉谷神社	現所	○	○							
3		昼休み	阿久和中小屋	現所・西尾藩	○	○	18日	○					
4		泊り	池上*	西尾藩	○	向新保(現所)		○					
5	29日	昼休み	下中津原*	西尾藩	○	宇須尾大谷(現所)	19日	中津原					
6		泊り	片屋*	西尾藩	○	小倉原(現所)		○					
7	4月 1日	昼休み	小倉原	現所	○	二磨家(福井藩)	20日	○					
8		泊り	厨瀬・道口浦	現所	新浦	厨瀬・道口浦		○					
9	2日	昼休み	四ツ杉	現所	○	○	21日	○					
10		泊り	笹谷	現所	○	○		○					
11	3日	昼休み											
12		泊り	(福井?)										
13	4日	昼休み	鶴宮	現所	○	○	22日	○					
14		泊り	天王*	西尾藩	○			○					
15	5日	昼休み	小泉*	西尾藩	○		23日	○					
16		泊り	下野田*	西尾藩	○	平井(現所)		○					
17	6日	昼休み		新村(天領)			24日	下新保(福井藩)					
18		泊り	西尾・宮谷・上真柄	天領	西尾・宮谷			西尾・宮谷・上真柄(天領)					
19	7日	昼休み		坂下(福井藩)天領			25日	坂下					
20		泊り	横住	福井藩	○(西尾藩)			○					
21	8日	昼休み	松ヶ谷*	福井藩	○(西尾藩)		26日	○					
22		泊り	堤寺*	福井藩	○			○					
23	9日	昼休み			(大野?)		27日	—					
24		泊り	西山	天領	○			○					
25	10日	昼休み			(大野?)		28日	大野					
26		泊り	ほう崎・大袋	天領・郡上藩	ほう崎(天領)			ほう(ほう崎?)・下荒井					
27	11日	昼休み		平泉寺(勝山藩)			29日	平泉寺					
28		泊り	森川	天領	○			荒野					
29	12日	昼休み					30日	光明寺					
30		泊り	光明寺	天領・現所	○			○					
31	13日	昼休み	豊原	福井藩	○		間4月1日	○					
32		泊り	舟寄	現所	○	○		○					
33	14日	昼休み	後山	現所	○	○	2日	○					
34		泊り	伊井	現所	○	○		○					
35	15日	昼休み	針原*	西尾藩	○	田島(現所)	3日	○					
36		泊り	下野	現所	○	○		○					
37	16日	昼休み	野中	現所	○	○	4日	○					
38		泊り	下番	現所	○	○		○					
39	17日	昼休み	薬江十楽	現所	○	○	5日	○					
40		泊り	加戸	天領	○			○					
41	18日	昼休み	柿原十楽	天領			6日	菅三(西尾藩)					
42		泊り	柿原十楽	天領	○	高瀬(現所)		宮谷(西尾藩)					
43	19日	昼休み	柿原十楽	天領	—		7日	細呂木通					
44		泊り	柿原十楽	天領	—								

表 2 廻国巡見使の日程と宿泊宿村

天明期廻国巡見使日程(寛政元年)							天保期廻国巡見使日程(天保9年)						
番号	日付	巡見使休泊	村名等	領区別	備考		日付	巡見使休泊	村名等	備考			
	3月 28日	泊り	敦賀町	小浜藩			4月 24日						
	29日		木目(木ノ井村国境)	福井藩									
1		昼休み	二ツ屋村	福井藩				昼休み		○			
2		泊り	今庄駅	福井藩				泊り		○			
3	4月 1日	昼休み	鯖波村	福井藩			25日	昼休み		○			
4		泊り	大滝村・岩本村	福井藩	在郷町			泊り		○			
5	2日	昼休み	広瀬村	福井藩			26日	昼休み		○			
6		泊り	今泉浦・河野浦	福井藩				泊り		○			
7	3日	昼休み	小倉原村	(現所)			27日	昼休み		○			
8		泊り	上海浦・下海浦	福井藩				泊り		○			
9	4日	昼休み	廣生浦	福井藩			28日	昼休み		○			
10		泊り	大丹生浦	福井藩				泊り		○			
11	5日	昼休み	和布浦	福井藩			29日	昼休み		○			
12		泊り	泥原新保浦	福井藩				泊り		○			
13	6日	昼休み	田ノ谷村	福井藩			30日	昼休み		○			
14		泊り	福井城下町	福井藩				泊り		○			『鏡片書』より
15	7日	昼休み	舟橋駅	福井藩			間4月 1日	昼休み		○			
16		泊り	松岡町	福井藩	田原下町			泊り		○			
17	8日	昼休み	永平寺門前	福井藩			2日	昼休み		○			
18		泊り	東郷町	福井藩	在郷町			泊り		○			
19	9日	昼休み	市波村	福井藩			3日	昼休み		○			
20		泊り	大野城下町	大野藩				泊り		○*			坂中通過
21	10日	昼休み	平泉寺村	勝山藩			4日	昼休み		○*			
22		泊り	勝山城下町	勝山藩				泊り		○*			
							5日	昼休み	笹谷*				
								泊り	東野*				
23	11日	昼休み	鳴鹿村	丸岡藩	丸岡藩宿駅		6日	昼休み	鳴鹿*				坂中通過
24		泊り	丸岡城下町	丸岡藩				泊り	丸岡*				
25	12日	昼休み	舟寄村	(現所)			7日	昼休み	舟寄*				北濃地通過
26		泊り	北金津町	福井藩				泊り	金津				
27	13日	昼休み	細呂木村	福井藩			8日	昼休み	細呂木				
									国境				

(上)

※網部分は北陸道の宿駅 村名の後の「駅・町・村・浦」は原史料をそのままつけ、宿のある地域の大きさを表現した

※天明期は「寛政元年酉年先觸」より作成

※天保期は「天保九戌四月 御巡見二付福井御役方往来出方帳 附廻り大庄屋大連彦四郎」に「天保九年御巡見様御順路并諸事御用扣 戊戌三月日」で補足(※印) 領区分は『角川日本地名大辞典 18 福井県』による

※番号は図2に対応

(左)

※天明期は「御巡見御泊村開書帳」より作成 ○印は左に同じ *は「寛政元年酉四月御巡見様御宿入用帳御休泊七ヶ村寄帳」、◇は「寛政元年酉四月八日御巡見様御宿仕事留帳」により確認あるいは補足 領区分は『角川日本地名大辞典 18 福井県』による、なお「御巡見御廻村御順道」は史料そのものの領とした

※「見分覚書」の宿村は実際に休泊した 宿村の近村を比定した

※天保期は「御巡見様御休泊并御本陣名前」(「天保九年御巡見様御順路并諸事御用扣 戊戌三月日」所収)より作成

※番号は図1に対応

図 1 天明期公料巡見使の宿村と越前の主要道

図 2 天明期廻国巡見使の宿村と越前の主要道

十楽村に変更になっているものもある。さらに、巡見間近でも天領である今立郡の西尾村・宮谷村に隣り村の上真柄村が、大野郡のほう崎村にやはり隣り村の大袋村が追加の宿村となっている例もみられる^{注19)}。このことから巡見の日程は巡見の約2ヶ月前でも正式決定していなかったことがわかる。そのため、「出来見分」にあるように3月6日の約半月前でも宿村候補から外れた平井村や宇須尾天谷村(丹生郡)のような宿村も出来形の見分の対象となったのであろう。小曾原村(丹生郡)のように泊り予定の宿村が昼休みの宿村になっている村もみられるが、これは泊り宿から休み宿への変更であるから準備もさほど問題はなかったと思われる。しかし、予定されていなかった村が休泊の宿村となることは、その準備が大変なこととなる。福井藩領・西尾藩領・鯖江藩領・天領の休泊宿村は「見分覚書」に含まれていないことから推定の域をでないが、預所の宿村が急遽天領や西尾藩領の宿村に変更あるいは同じ天領内で宿村が変更されても巡見に対応できているところを見ると、福井藩領・西尾藩領・鯖江藩領・天領でも預所と同様な休泊宿の準備が公料巡見使のためになされていたと推定され^{注20)}、さらに宿村が変更されても公料巡見使の宿にはそれ程大きな宿の施設が求められていなかったことが考えられる。なお、「見分覚書」では福井藩領の二階堂村で昼休み宿をとる予定となっていたことや、今庄で福井藩役人が公料巡見使を迎えていることから^{注21)}、預所とは別に福井藩領内でも公料巡見使のための休泊宿の準備がなされていたことがわかる。

表1中の巡見使が実際に休泊した宿村で、天領や預所ではなく西尾藩領が7ヶ村、そのうち預所の宿村から西尾藩領の宿村に変更になったものが5ヶ村ある。また、福井藩領の宿村が3ヶ村、鯖江藩領が2ヶ村ある。当時30万石の福井藩は越前の多くを領有し、西尾藩は本拠地を三河幡豆郡西尾に置いて越前に2万7000石余しか領有していないにもかかわらず、私領である西尾藩領に巡見使の休泊宿が多くなっている。この理由は西尾藩主松平家が歴代、大坂城代・京都所司代・老中など幕府の要職につく家柄であり、当時の藩主松平乗完は寛政元年から老中であつたことが大きく関係しているとみられる^{注22)}。また、その役職は領地を幾内て与えられることがおおく、所領の増減を越前の所領と天領とが交換されることによって処理されることが度々あり、そのため西尾藩領は天領と深い関係にあったことが推測される^{注23)}。

図1をみると、公料巡見使の巡見地域は前述のような特殊事情のある西尾藩領を別として、各藩領ではなく、天領や預所を中心とする主要道から外れた農村地域を主に巡見し、その道沿いの村を休泊宿としている。特に預所や天領の多い坂井郡・丹生郡を中心に巡見していることがわかる。ちなみに天保期公料巡見使の日程・道筋および休泊宿村を見ると、天明期公料巡見使とほぼ同じと考えてよく、日程で1日、休泊宿村で7ヶ所(内2ヶ村は一部が同一)が異なるのみで、その異なる宿村同士も隣村となる。このことから天明期公料巡見使の日程・道筋と休泊宿村は特別なものでなかったことが推定される。

一方、同時期に派遣された廻国巡見使は同年3月29日に今庄へ到着後、越前国内を巡見して廻り、4月7日に細呂木を通り、加賀に向つた^{注24)}。廻国巡見使の越前国内の日程・道筋と休泊宿村は、廻国巡見使が4月6日に今泉浦・河野浦に宿泊した時の記録である「寛政元酉年先觸」^{注25) 26)} からわかり、表2に示すとおりで、休泊した

宿村の位置は図2(■印)のようになる。また、「天保九戌四月 御巡見ニ付福井御役方往来出方帳 附廻り大庄屋大連彦四郎」^{注27) 28)} から天保期(天保9年4月下旬から閏4月上旬)の越前国内の廻国巡見使の日程・道筋と休泊宿村を同表に示した。この図からわかるように、廻国巡見使は海岸沿いの道を別として北陸道・羽生道・勝山道をはじめとする越前の主要道を通り、その宿駅・城下町・在郷町を中心に休泊していることがわかる。その休泊宿村は越前の多くを治める福井藩領と大野・勝山・丸岡の各藩領で、天領は福井藩の預所である舟寄村・小曾原村の2ヶ所のみである。天保期の廻国巡見使の日程・道筋と休泊宿村をみると、日程が1日長く越前を巡見しているが、それ以外は天明期の廻国巡見使のものと同じであった。

以上のように廻国巡見使と公料巡見使の越前における巡見地域に違いがみられた。廻国巡見使は諸藩に派遣されたものであり、公料巡見使は天領(預所を含む)に派遣されたもので、巡見の目的がそれぞれの担当地域を調査・監察することにあつたからである。日程からみると、廻国巡見使は14日前後、公料巡見使は22日前後で越前国内を巡見している。「越前世譜」^{注29)}によれば、廻国巡見使は150日の内に8ヶ国(近江・若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡)を巡見する必要があり、公料巡見使は4ヶ国(飛騨・越前・越後・佐渡)の天領および預所の巡見が必要であつた。この調査日数の違いが巡見道筋の選択に関係があつたことも考えられる。

3. 3 公料巡見使と廻国巡見使の従者人数と宿の大きさ

公料巡見使の氏名や随行人数は4月8日に泊り宿となつた足羽郡境寺村の宿支払い記録「公料御巡見様御泊諸事留帳」^{注30)}が参考になる。境寺村は今立郡横住村から大野郡西山村の巡見道筋にある福井藩領で、石高161石余の小さな山村である^{注31)}。公料巡見使は比留間助左衛門、林家三郎、工藤八右衛門の3名で、それぞれが3軒の宿に泊つた。その時に宿代として木銭・米代を支払っている証文の控があり、比留間助左衛門は一番宿の又右衛門に「一白米三升五合 此代式百四拾三文 但御上御老人御下六人御上下七人御老人ニ付五合ツゝ 一木銭百四拾文但 御上御老人三拾五文 御下六人拾七文ツゝ」、林家三郎は二番宿の彦右衛門に「一木銭九百七文 御上御老人三拾五文 御下拾七文 一白米口口合」、工藤八右衛門は三番宿の惣右衛門に「一木銭九百七文 同 御上御老人三拾五文 御下四人拾七文ツゝ 但御老人ニ付 一米式升五合」と、それぞれ木銭・米代を支払っている^{注32)}。この内容から比留間助左衛門は従者6人、林家三郎は従者4人、工藤八右衛門は従者4人を従え、公料巡見使一行は総計17人であることがわかる。また、前月の28日に阿久和中小屋での昼休み時の食事献立とともに出された膳の数量には「御上十七人江戸 六十四人福井 め八十老人」^{注33)}とあり、江戸からの人数17人が境寺村での公料巡見使の一行数に一致する。なお、福井の64人は公料巡見使に同道あるいは宿に向いた福井藩あるいは同預所の郡奉行・代官・医師・徒などとみられる^{注34)}。

ところで、林家三郎の宿記録には、「一林家三郎御家来中 中村十兵衛、落合茂左衛門 但し装束木綿 御中間式人」とあり、従者4人のうち2人が中間であつたことがわかる。中村十兵衛は主人に先立ち宿に入り、主人到着の準備をし、宿代の支払時には宛名になっている。中番村次郎吉の「御巡見御泊村中聞書帳」では誰をさしているかはわからないが、公料巡見使一行の用人が道先案内の郡中惣代に質問をしている。このようなことから「公料御巡見様御泊諸事留帳」の

「御下」は用人や中間などを指していると考えられる。以上から公料御巡見使の一行は5～7人1組の3組であったとしてよく、その人数に対応した宿が1組に1宿求められたと考えられる^{注35)}。

一方、廻国巡見使は筑紫従太郎、大久保長十郎、堀八郎右衛門の3名で^{注36)}、その随行人数はわからないが、一般にそれぞれ40名前後といわれている^{注37)}。ちなみに天保9年廻国巡見使の木下内記(2000石)、小姓組石尾織部(2200石)、書院番寛新太郎(1500石)3名は主従合わせてそれぞれ41人、41人、44人であった^{注38)}。この廻国巡見使3名一行はそれぞれの宿に宿泊したが、従者人数が多くて一つの宿では対応できず、下宿として別宿に下層従者が泊っている。例えば近江木本宿での木下内記をみると、宿の略平面図に部屋の大きさ、従者数を記入し、直上に「一番御本陣 御上下四拾老人 内拾八人御下宿」とあるように、本陣には23人しか宿泊できず、下宿に18人も宿泊している。他の二人も同様で二番本陣には24人で下宿に17人、三番本陣には22人で下宿に22人であった。これは近江海津宿でも同様であった。このことから廻国巡見使の休泊宿はその人数に対応した宿のある宿駅や村が求められていたことが想像できる。以上から公料巡見使の休泊宿は、廻国巡見使の休泊宿とは異なり、はるかに小規模な建物で可能であったことがわかる。

3. 4 公料巡見使の休泊宿の決定

「見分覚書」によれば、宿の決定は前回の宝暦11年(1761)巡見使の例にのっとりおこなわれていたが、前例のなかった南条郡向新保村の例と、候補となる宿が足りなかった丹生郡小曾原村が宿決定の参考になる。向新保村は前回の巡見では遠見といって巡見使の通る道筋にはなく、遠くから見るだけの村であったが、今回新たに道筋となり、さらに宿泊の候補村となった。向新保村の村役人は「(前略)殊ニ御泊リニ被仰付候得共 前格ニも無御座候へ共御指図奉願候」と巡見使の泊りの前例がなく指示を仰ぎ、つづけて「当村之儀近年及困窮候得ハ 家居等も不宜候へ共 御宿三軒村役人共見立意候間、御見分被下様申之ニ付 村役人共へ為案内致令見分候」と、宿候補を見立てたので役人に見分をしてもらっている。このことから前もって村役人が宿の候補をあげ、役人が見分して決めていたことがわかる。そして「(前略)与左衛門と申者御宿之積村役人共申立候得□□ 座敷天井等も無之ニ付令吟味 久兵衛と申者へ申付候処(後略)」とあり、与左衛門の宿は座敷に天井が張ってないとの理由で、役人が宿候補を変更することもあった。もっとも久兵衛の家は当初村役人によって宿候補となっていたが、久兵衛が心変わりして与左衛門に変更になっていたのがあった。

一方、小曾原村は泊り宿であるのに3軒ではなく、2軒しか見分されていない。その理由は「一小曾原村役人共へ申究候ハ外ニ相応之家居無之哉と相尋候処 近年困窮仕候外ニ御宿ニ可相成家家居無御座候 然共龜松之座敷有之者も御座候得共間敷無之御宿等相勤り不申段申之(後略)」とあり、座敷をもち、「間敷」つまり部屋数のある建物がないので宿候補を2軒しかあげなかったことがわかる。それで役人に指示を仰いでいるのである。このことを受けて村役人と役人が論議を重ねた結果、追って評議の上で知らせることとなった。この結末は「出来見分」によれば、小曾原村の西信寺が追加されて、泊り宿は3軒となっている。以上のように休泊宿は天井を張った座敷を含めて数部屋ある建物が宿として選ばれた。

4. 「見分覚書」・「出来見分」からみる公料巡見使の宿

4. 1 公料巡見使の宿

各宿の修理前の見分内容は下記のように記載される。

「御宿 次郎兵衛 座敷八畳 次ノ間八畳 并四畳半 土間ニ而 仮縁ヲはりたし八畳ニ致候并上下仮湯殿両所致候様ニ申渡候

同 清右衛門 座敷六畳 仮湯殿雪隠拵可申事 次ノ間六畳但一間通り押込有之 次六畳間と四畳一ツニ致候得ハ十畳間ニ相成申候

同 久兵衛 座敷八畳仮湯殿雪隠拵可申事 次ノ間六畳外ニ仮縁ヲはり八畳間ニ可致筈 次キ通り仮湯殿雪隠可致事 右之通申渡候」

これは南条郡向新保村の例で、はじめにこの村が泊り宿村となった経緯があつて省略されているが、最初に村名と休泊の区別、宿の持主名、座敷・次ノ間・その他の部屋の数、大きさ、部屋が小さい場合はその拡張の方法、部屋数が足りない場合はその増部屋の方法、さらに上下の湯殿や雪隠の有無、湯殿や雪隠のない場合には仮建ての指示を申し渡している。また、時には中小屋村の浄教寺の「一中小屋村御昼休宿浄教寺貧寺大破ニテ上ノ間張付表替等之儀委細申渡ス」、笹谷村の乗泉寺の「何も至極之大破ニ御座候」と建物の損傷具合も記し、建立間もない小曾原村の光照寺では「座敷八畳次ノ間八畳佛拾畳 去年再興之寺故何も壁上ぬりも無之 唐紙梁物少々有之縁無之(後略)」と室内の様子を記した上で、仮縁の設置から座敷の天井仕様を示して造作を指示している。さらに、下野村の十右衛門宅のように「畳表替襖共不残修繕仕候様申聞候口承知仕候」と、畳表替や襖の修繕の指示もみられる。このような修理前の見分は「右御泊御昼休共村々之御宿名前之通間取等別紙絵図面ニ繕ひ方を印置申候」とあるように、「見分覚書」の他に宿の絵図面をもちいて修繕内容を記入したとみられる。

これらの宿総数は38軒で、農家32軒、寺院5軒、神社1社の内訳となり、休泊の別では泊り宿29軒(農家25、寺院4)、昼休み宿8軒(農家7、寺1)、小休止の神社1社である。宿毎の記載内容を村名、休泊の別、宿名、部屋名、大きさ、上下湯殿の有無、上下雪隠の有無などを一覧にしたものが表3である。巡見使は3名であったから泊り宿はそれぞれに用意され、昼休み宿は巡見使3人で一つの宿を用意していたことがわかる。

巡見使の泊り宿として必要とされる部屋は、主室となる座敷とそれにともなう上湯殿・上雪隠、次ノ間、そして一あるいは二室の部屋と下湯殿・下雪隠であることがわかる。主室の座敷は6～12畳までの大きさがあり、八畳間が一番多い。高塚村の彦左衛門家の見分内容に「座敷八畳床造作無之ニ付申付候」と特に記されていることから、巡見使宿の座敷には床の間が必要であったことがわかり、同時に巡見使宿を勤める農家には普通に床の間が備えられていたことがわかる。次ノ間は6～12畳半の大きさで、6畳が一般的である。下湯殿・雪隠は次ノ間に付属していたようで、舟寄村の九十郎家の見分に「座敷八畳次ノ間八畳三尺通縁側并外縁湯殿雪隠有 勝手之方ニ八畳六畳八畳三間有之 次ノ間湯殿雪隠小便所仮ニ可致事」、同村政右衛門家の見分に「座敷八畳次六畳二間四畳一間 上雪隠有 湯殿仮并次通湯殿雪隠仮ニ相立可申事」とある。

ところで、天明期の巡見使は前述のように主人と従者が合わせて7人あるいは5人であり、うち従者は用人と中間の最低二つの階層に分けられるから3室以上の座敷が巡見使の宿に必要となる。しかし、泊り宿に座敷と次ノ間の2室のみが5軒、3室が11軒、4室が

表3 「見分覚書」・「出来見分」にみる天明期公料巡見使の宿

郡	村名	泊・休	室名	部屋名							備考	「出来見分」より	部屋数	合計 畳数	増部屋 の有無	増畳数	増設後の 合計畳数	
				座敷	上湯殿	上雪隠	次ノ間	その他部屋		下湯殿								下雪隠
南条	向新保	泊	次郎兵衛	8畳	仮		8畳	土間四畳半→仮縁で8畳		仮			3	20.5		3.5	24	
			清右衛門	6畳		仮	仮	6畳	10畳（4畳+6畳）					4	22		22	
			久兵衛	6畳	仮	仮	6畳→仮縁で8畳	6畳離れ		仮	仮		3	18		2	20	
	中小屋	昼休	浄教寺	6畳			12畳	仏前18畳、8畳、四畳半			貸寺大破	壁塗り、渡縁、雪隠修繕、唐紙張替、床張附、障子張	5	48.5			48.5	
丹生	小倉谷	小休	氏神社															
	平井	泊	四郎兵衛	8畳	○	○	8畳	10畳、8畳		○	○		4	34			34	
			伝右衛門	8畳		仮	○?	10畳			仮?	○		2	18			18
			市兵衛	8畳	○	○	8畳			仮	仮		2	16			16	
	宇須尾大谷	昼休	甚右衛門	8畳			○	10畳	8畳				見隠垣設置	3	26			26
			七郎右衛門	12畳		○	8畳	8畳、6畳		大破	大破		4	34			34	
	小馬屋	泊	光照寺	8畳	仮	仮	8畳	仏前10畳、8畳、6畳		仮	仮	座敷に仮縁、座敷次ノ間仮天井	5	40			40	
			(西信寺)									大方出来表替、壁上部り、唐紙張替相済	不明					
	(二階堂)	昼休																
	厨浦・道口浦	泊	西徳寺	8畳	繕	繕	8畳	6畳、仏前12畳		仮	仮	不残出来	4	34			34	
			登峯寺	8畳	繕	繕	8畳	8畳、8畳		仮	仮	十五日までに出来	4	32			32	
			又兵衛	10畳			6畳	8畳、8畳、8畳		仮	仮		5	40			40	
	四ツ杉	昼休	新兵衛	10畳		○	12畳半	8畳、6畳			○		4	36.5			36.5	
	笹谷	泊	赤兵衛	12畳	仮	○	8畳	8畳、10畳		仮	仮		4	38			38	
			与右衛門	6畳	仮	仮	8畳	8畳、4畳、8畳		仮	仮	次ノ間仮天井	5	34			34	
			乗泉寺	8畳	仮	仮	6畳	仏前12畳、12畳、6畳		仮	仮	12畳屏風間、いづれも至極大破	5	44			44	
	朝宮	昼休	仁左衛門	8畳	○	○	8畳	8畳、8畳			○		4	32			32	
	坂井	寺峯	泊	九十郎	8畳（縁）	○	○	8畳	勝手の方に8畳、6畳、8畳		仮	仮		5	38			38
政右衛門				8畳	仮	○	6畳、6畳	四畳半		仮	仮		4	24.5			24.5	
赤助				8畳	○	○	6畳、6畳			仮	仮		3	20			20	
後山		昼休	茂右衛門	8畳（縁）	○	○	6畳（縁）、四畳半	勝手の方に8畳、四畳半			至極大破		5	31			31	
伊井		泊	圓助	8畳	○	○	6畳（縁）	勝手の方に6畳→仮縁で間取変更		仮	仮		3	20	○	?	20+?	
			平右衛門	8畳（縁）	○	○	6畳、四畳半	勝手に仮縁で6畳		仮	仮		3	18.5	○	6	24.5	
			十(半?)右衛門	8畳	仮	○	6畳（縁）	勝手に仮縁6畳		仮	仮	半右衛門当時繕済済中	2	14	○	6	20	
田端		昼休	九郎左衛門	8畳		○	6畳	9尺三間間取（6畳3室?）			9尺三間天井有		5	32			32	
下野		泊	十右衛門	8畳	仮	仮	8畳	勝手に8畳、外に仮縁8畳				畳表替、換修復	3	24	○	8	32	
			藤左衛門	8畳（縁）	○	○	6畳	勝手に仮縁で6畳		仮	仮		2	14	○	6	20	
			佐左衛門	8畳	仮	○	6畳	勝手に6畳、外に仮縁6畳		仮	仮		3	20	○	6	26	
野中		昼休	五左衛門	8畳	○	○	6畳（縁）	四畳半、勝手の方8畳、6畳					5	32.5			32.5	
下番		泊	五郎左衛門	8畳、4畳	○	○	6畳	6畳、勝手に仮縁6畳		仮	仮		4	24	○	6	30	
			藤左衛門	8畳	○	○	8畳	四畳半、四畳半、外に仮縁6畳		仮	仮		4	25	○	6	31	
			六兵衛	8畳	仮	仮	6畳	四畳半、勝手に仮縁6畳		仮	仮		3	18.5	○	6	24.5	
堀江十盛		昼休	半右衛門	8畳	○	○	8畳（縁）	勝手の方6畳二間					4	28			28	
高塚	泊	八左衛門	8畳	仮	○	6畳	6畳、勝手に仮縁6畳		仮	仮		3	20	○	6	26		
		彦左衛門	8畳（床無）	仮	仮	8畳	勝手に仮縁6畳二間		仮	仮	床造作	2	16	○	12	28		
		甚右衛門	8畳	仮	仮	6畳（縁）	四畳半、勝手に仮縁6畳					3	18.5	○	6	24.5		
平均(寺は除く)													3.53	25.23				

○：有り 仮：仮建 繕：修繕 縁：3尺縁側付き

村名は寛政元年に実際に宿となった村 「出来見分」には坂井郡の記録はない

小曾原の西信寺は「出来見分」より追加 二階堂村は福井藩領

11軒（うち寺3軒）、それ以上が5軒（うち寺3軒）である。農家とは明らかに異なる寺6軒を除くと、2室のみでは問題となるので部屋を仮増設している宿が坂井郡の3軒のみで、丹生郡の2軒はそのままである^{注39)}。丹生郡の2軒はいずれも平井村で、一方は上下の雪隠が備わり、他方は上湯殿上雪隠が備わる宿であるから、その他の部屋の記入忘れが十分考えられる。3室がありながら部屋を1室仮増設している宿が坂井郡に7軒^{注40)}、4室ありながら1室仮増設している宿が2軒みられる。この12軒は下番村の五郎左衛門家の「座敷八畳之上ニ四畳敷有 次之間六畳湯殿雪隠有 夫より同六畳勝手之方ニ仮縁ヲはり六畳拵仮湯殿雪隠可致事」や下野村の佐左衛門家の「座鋪八畳雪隠有 次キ六畳 勝手之方六畳其外ニ仮縁ヲはり六畳鋪拵可申管上下湯殿雪隠共仮建ニ可致事」の例にみられるように、勝手あるいは外に仮縁を張り、増築している。一方、南条郡や丹生郡では部屋を拡張する例が向新保村に2軒みられるが、3室あるいは4室の宿は何ら部屋数の増設がなされていない。坂井郡の多くの宿では座敷に付属する上雪隠が常設であり、上湯殿が備えられている宿も南条郡・丹生郡の宿より少ないとは思えない。このことから坂井郡の宿に巡見使の宿とするには不都合な間取りが多くみられたことが考えられる^{注41)}。

4. 2 工事内容

建物の修理内容の記述は一部の宿に限られ、「見分覚書」では畳の表替え、襖の修復で、その他の多くの工事は仮建ての上下の湯殿雪

隠、目隠し垣、天井張り、仮縁の設置による部屋の追加などであった。「出来見分」によれば、壁の上塗り、唐紙、障子の張り替え、床の張付け、雪隠の裏板打ち替え、濡縁の仕直しが一部の宿に記入されている。「見分覚書」で部屋が大破と見分されている宿でも出来形の見分時の記述が全くなく、部屋が修繕済みであったことは明らかで、このことから考えて壁の上塗りや畳の表替え、襖や障子の張り替えは普通におこなわれていたと推定される。なお、修理に際して新しい木材で修理された部分は煤で塗り、目立たないようにすることが、廻国巡見使担当の福井藩役人に申し渡しによってなされており^{注42)}、巡見使を迎えるために過度な修繕がおこなわれていないような配慮が求められていたようである。

4. 3 公料巡見使宿の修理費用

公料巡見使が使用する宿の修理費用がどこから支出されたかを明確にしめす史料は、現在のところ見当たらない。しかし、「見分覚書」の向新保村では「一右村役人共御宿本人共ニ申立候ハ御繕廻り御道具夜具等一向相調不申段申之候付損金ニ而借集メ候様申渡ス 一右品々被仰聞候趣奉畏候 其節ニ至候ハ何卒拝借被仰付候様申立ニ付 其儀御取上無之段申究」とあり、村や宿の持主の負担であったことがわかる。道橋の修繕も道の区間によってその担当村が決められ、村単独あるいは近隣村の人足で直されている。そのため「見分覚書」には、修理前見分時に宿の免除、費用の拝借、道路普請の負担軽減のため郡中人足の願いが多々みられる。

5. 天明期の上層農家住宅

公料巡見使の宿となった農家は、その階層の記述がみられない。しかし、下番村の宿を勤めた五郎左(右?)衛門、藤左衛門、六兵衛は庄屋あるいは長百姓を勤めていた家柄であることが、天保9年の公料巡見使関係記録などから確認でき^{註43)}、高塚村の八左衛門も庄屋あるいは大庄屋を勤める家柄であった^{註44)}。このことから他の宿を勤める農民も上層農民であったと考えられる。表3から天明7年頃の上層農民の主屋建物は部屋数が平均3~4室、少なくて2室、多くなれば5室あり、その部屋数の中には床の間と次ノ間を備えた8畳ほどの大きさの座敷がほとんどの農家にあったことがわかる。座敷は大きくなると12畳の大きさもあった農家もみられた。さらにその座敷には休泊宿32軒のうち23軒に上雪隠があり、7割強の農家に上雪隠が付属していたことになる。丹生郡の4軒の農家には上下の雪隠がみられるものもあった。また、泊り宿となった25軒のうち9軒に、昼休み宿となった5軒のうち3軒の農家に上湯殿が設けられ、休泊の宿となった1/3の農家に上雪隠・上湯殿の両設備があったことになる。このことは公料巡見使の宿を勤めた上層農家とはいえ、多くの農家に接客の設備が十分整っていたことがわかる。この接客設備の充実が巡見使宿を契機としてなされたのか、あるいは上層農家としての役務上必要とされたのかなどは、今後の研究課題としたい。

6. まとめ

天明期に越前国に派遣された廻国巡見使と公料巡見使の一連の史料を比較検討し、公料巡見使の休泊宿村と休泊宿の建物について以下の点が明らかとなった。

- 1) 公料巡見使の宿村は主要道を外れた農村地域の村が主に使われた。
- 2) 公料巡見使の一行は5~7人程度1組の3組で、その人数に対応した宿が3軒求められた。
- 3) 宿は床の間をもち天井を張った座敷を含めて数部屋ある建物が選ばれた。
- 4) 宿に必要とされる部屋は、主室となる床の間のある座敷と、それにとまう上湯殿・上雪隠、次ノ間と下湯殿・下雪隠、そしてあるいは二室の部屋であった。
- 5) 宿の準備として畳の表替え、壁の上塗り、唐紙や障子の張り替え、床の張付け、雪隠・濡縁の修繕などの他に、仮設の上下雪隠や湯殿の造作があった。
- 6) 公料巡見使の宿を勤めた農家に限れば、天明期の上層農家は床の間と次ノ間を備えた8畳ほどの大きさの座敷を備えた住宅が大多数であり、その1/3ほどに上雪隠・上湯殿の設備を備えていた。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、北嶋雅幸氏、大連勘次氏、松平宗紀氏、福井県文書館、福井県立図書館をはじめとする関係各位から資料提供や助言を戴きました。これら関係各位に末尾ながら感謝申し上げます。

注

注1) 岡田悟「御料御巡見衆御休泊所絵図の研究」その1~5 日本建築学会計画系論文集620号2007.10、632号2008.10、649号2010.3、666号

2011.8、673号2012.3

注2) 福井藩では預所がすでに貞享の半知以前の寛永12年(1635)からみられた。福井藩の預所の復活は享保5年(1720)からで、預所の石高は時代によって前後し、幕末までつづいた。預所は福井藩のみでなく、天領近隣の諸大名にもみられた。『福井県史通史編4近世2』福井県 p36~45 1996.3
注3) 越前国は北から坂井郡、吉田郡、足羽郡、丹生郡、今立郡、南条郡、飛騨・美濃境の大野郡、若狭・近江境の敦賀郡の8郡よりなる。敦賀郡は寛永元年福井藩主松平忠直改易後に幕府領となったが、その冬京極忠高に与えられて小浜藩領となった。寛永11年京極氏にかり酒井氏が入封し、廃藩置県に至る。このため敦賀郡には預所なく、本論考中に敦賀郡はあられず、越前とは南条郡・敦賀郡の境となる木ノ芽峠以北を越前として本稿ではあつかう。

注4) 『新訂増補国史大系第四十八巻 続徳川実記第一篇』国史大系刊行会 1933 天明7年3月27日条。

注5) 北嶋英彦家文書 00146「天明七年未六月十九日 御預所南条丹生坂井村々御巡見御泊御昼休宿見分覚書」なお、以下の各家所蔵文書は福井県文書館の複製資料により、その各家の資料番号を表示する。

注6) 北嶋英彦家文書 00144「寛政元年三月六日より 御巡見様御泊り御昼休宿出来見分」

注7) 『岩波日本史辞典』岩波書店 1999.10 正徳3年以降天領では大庄屋は廃止されたと言われる。

注8) 巡見使の宿では宿となる建物の持主(亭主)が接待するのではなく家への案内のみで、村々の上層農民が仮亭主・脇亭主・給仕人となり、諸用事を取り扱っている。野尻五郎右衛門家文書 00006「天保九戊戌年閏四月四日御巡見使様御泊諸事控帳 老番御本陣五郎右衛門」ほか。

注9) 前掲5)に「一小曾原村御泊りより御本領二階堂村お昼休」とある。

注10) 川崎直右衛門家文書 00012「午歳御物成銀米納方本通」弘化3年

注11) 大連彦兵衛家文書 00044「諸国御巡見御候候二付御表郡奉行中并代官中江被仰渡御書付之写 御触之写 両替駄賃銭并掛り御役人中知行高 其外村々寄調帳 御献立 寛政元西二月 大連彦兵衛」

注12) 前掲2) p39. 鈴木準道著 舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』歴史図書 p33 1977.11.

注13) 福井藩の作事組織である作事所に属する技術職の大工頭・中判・大工棟梁の名がみられない。福井藩の作事組織については下記による。吉岡泰英「建築の造営と大工」p274~『福井県史 資料編14建築・絵画・彫刻等』福井県 1989.7

注14) 大連彦兵衛家文書 00047-021「御巡見御宿御修覆御入用帳帳 下番村」この文書は福井藩の作事所役人などが作成したものである。詳細は次稿で検討する。

注15) 北嶋英彦家文書 00152「寛政元年西四月日 御巡見御泊村中聞書帳 中番村次郎吉」

注16) 前掲15)では次郎吉が同道あるいは記録した宿村しかわからないので、内藤源太郎家文書 00143-003「寛政元年西四月御巡見様御宿入用帳御休泊七ヶ村奇帳」と、「寛政元年西四月八日公料巡見様御泊仕事留帳 赤井嘉津兵衛加持」『美山町史上巻』1984.3 所収 p231によって一部を補った。

注17) 大連彦兵衛家文書 00047-022「御巡見御廻村御順道帳 川口本庄大連彦兵衛」末尾に「寛政元年西二月三日左之通御順道」とあり、2月3日現在の予定であることがわかる。藩領の記入は鯖江藩領が天領と記載され、享保5年以前の内容となる。ただし、越前では領替えがしばしばおこなわれているので、当時の史料による詳細な検討が必要である。

注18) 鈴木与兵衛家文書 「御領巡見様御休泊井御本陣名前」「四 御巡見様御順路并諸事御用控」所収『大野市史 諸家文書編二』1981.3 p508~511

注19) 丹生郡預所の厨浦が厨浦・道口浦となっている例もあるが、「見分覚書」ではすでに厨浦・道口浦とあり、「御巡見御廻村御順道帳」に道口浦の記入忘れも考えられる。大野郡大袋村は『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店 1989.12によれば、天領と郡上八幡領の相給村であるが、その多くは天領であった。

注20) 前掲16)の「寛政元年西四月御巡見様御宿入用帳 御休泊七ヶ村奇帳」によれば、実際に休泊した宿の修理費用が7月に決算されており、西尾藩でも福井藩預所と同じ準備がなされたことがわかる。

注21) 前掲15)

注22) 前掲2) p34.『朝日町誌通史編』朝日町 2003.3 p233

注23) 前掲15)によれば、西尾藩の天王領(福井での西尾藩の領地)の割入の申し入れで、天王領庄屋と預所郡中惣代が今庄宿からの公料巡見における人馬継ぎの人足応援を求められ、それに応じている既述がみられる。このことから坂井郡の預所は、南条・丹生郡の西尾藩領と深い関係にあることがわかる。なお、西尾藩領となる明和元年(1764)までは3郡は天領あるいは預所

として同一支配下にあった。

注24) 福井県立図書館・郷土誌懇談会編『片簞記・続片簞記上』 福井県立図書館 1955.3 p743 寛政元年3月29日条

注25) 浜野源三郎家文書「寛政元酉年先觸」『河野村誌 資料編』1980.8 p572

注26) 大連彦兵衛家文書 00047-001「天明九酉年正月 御廻国御用諸役人往還出方帳 大連彦四郎」 この史料は正月時点での予定された休泊宿村であるが、本史料に記載された宿村は前掲25) に一致する。

注27) 大連彦兵衛家文書 00047-013「天保九戌四月 御巡見ニ付福井御役方往来出方帳 附廻り大庄屋大連彦四郎」 天保9年の廻国巡見使は4月24日から閏4月8日まで木ノ芽峠より北の越前各地を巡見している。

注28) 前掲18)「御廻国様御休泊覚」「四 御巡見様御順路并諸事御用控」所収『大野市史 諸家文書編二』1981.3 p508 で前掲27) の「天保九戌四月 御巡見ニ付福井御役方往来出方帳 附廻り大庄屋大連彦四郎」の抜けている宿を補足した。

注29) 福井県立図書館保管 松平文庫 117「越前世譜 173(斎善4)」 天保9年2月6日条

注30) 大連彦兵衛家文書 00044-002「寛政元酉年四月八日 公料巡見様御泊諸事留帳 大庄屋大連彦四郎」

注31) 前掲19)『角川日本地名大辞典 18 福井県』

注32) 木銭合計がいずれも4文多くなっている。この理由は、九六銭(96銭で100文と扱う)で支払われたため丁銭(正しく100文とする)として勘定するために4文追加したことによる。

注33) 前掲11) なお、表紙日付は2月であるが、御献立では厨浦・道口浦での泊りの夜食に「御寄合ニ付 御酒肴いろいろ出ス」とあり、予定献立ではなく実際の記録とみられる。

注34) 前掲11) に巡見使の宿に福井藩の役人が出向くことが指示されている。

注35) なお、天保期の公料巡見使一行は、10人、7人、5人で多少多かった。詳細は次稿による。

注36) 前掲24) 寛政元年3月29日条 p743 なお、本書には筑紫従太郎千門は津久士従太郎とあるが、後掲37) や前掲2)『福井県史通史編4近世二』には筑紫とあり、これが正しい。

注37)「厳有院殿御実記」には1000石以上30人、1500石以上35人、2000石以上40人、2500石以上45人とある。半田隆夫「幕府巡見使体制と西国経営」藤野保先生還暦記念会編『近世日本の政治と外交』雄山閣 1993.10

注38) 大連彦兵衛家文書 00143「御廻国様江州海津若州熊川御休泊開合帳 天保九戌戌年四月十四日 大連彦四郎控」、同00047-017「御廻国様江州木本御泊開合帳 天保九戌年 大連彦四郎控」。後の史料では木下内記の部屋割り人数の合計が総計と一致していない。また、従者の呼び名も家老・用人、手廻り、取次、徒となる。両史料から使番木下内記(2000石)は同行者数が用人2人、繕人3人、中小姓6人、徒5人、足輕5人その他19人で合計41人、小姓組石尾織部(2200石)が用人2人、繕人2人、中小姓7人、徒5人、足輕9人、その他15人で合計41人、書院番寛新太郎(1500石)が用人2人、繕人2人、中小姓6人、徒5人、足輕7人、その他16人で合計44人であったことが確認できる。なお、前掲29)「越前世譜 173(斎善4)」によれば、木下内記は用人2人、給人3人、中小姓6人、徒5人、足輕9人、中間15人で合計41人、石尾織部は用人2人、給人2人、中小姓7人、徒5人、足輕9人、中間15人で合計40人、寛新太郎がの用人2人、給人2人、中小姓6人、徒5人、足輕7人、中間15人で合計35人の予定であり、その他とは中間であることがわかる。

注39) 前掲30) によれば、足羽郡境寺村の三番宿である惣右衛門家で、「(前略)座鋪間取御覽被来候ニ付 湯殿雪隠等迄御案内仕懸御伺候處 随分勝手宜候間 旦那様斗別ニ間取致候而 残り之者々ハ一所ニ御入口口成候様被聞候故 間取も致置候間(中略)左口荷物ト下々者共一所可為置旨被聞候ニ付其趣取斗仕候」と、従者(用人とみられる)によって間取りの変更が指示され、主人が独り部屋で、従者(4人)と荷物が一つの部屋となっているので、2室でも可能であったことがわかる。

注40) 伊井村の圓助は「勝手六畳敷ニ仮縁ヲはり間取可致事」とあり、単なる縁の拡張とも考えられるが、坂井郡の他例からみて不自然であり、本例に含めた。

注41) 福井宇洋「福井県の民家」『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』福井県 1989.7によれば、一般的に越前の北部・中部・南部(敦賀を除く)では広間型でも主流となる農家の平面が異なるといわれ、北部の坂井郡は妻入で座敷・ダイドコロ・土間を一行に配置、中部の丹生郡は妻入で座敷の手前にダイドコロと土間を配置、南部の南条郡は平入で棟の前後で二分し、手前に土間とダイドコロ、奥に座敷となる。この平面が巡見使の宿の使い方に関係があるのではと考えられるが、今後の調査を待ちたい。

注42) 前掲11) には覚として「一御休御泊御宿之修覆新キ材木等作事目立候 処ハ煤塗可口事」とある。この史料には廻国および公料巡見使の両方のことが記載される。

注43) 五郎左(右?)衛門は寛保3年に庄屋であった。大連彦兵衛家文書「家秘簿」『福井県史資料編4中近世二』福井県 1984.1 所収 寛保3年11月条 p473。また六兵衛は延享元に庄屋であった。延享元年6月条 同p474。大連彦兵衛家文書 00047-016「天保九戌戌年閏四月四日 公料御巡見様御泊り諸事留帳三番御宿下番村六兵衛」には「下番村 長百姓藤左衛門庄屋市兵衛」とある。

注44) 前掲43) の『福井県史資料編4中近世二』佐藤禮三家文書解題 p540。

(2013年1月27日原稿受理, 2013年5月23日採用決定)